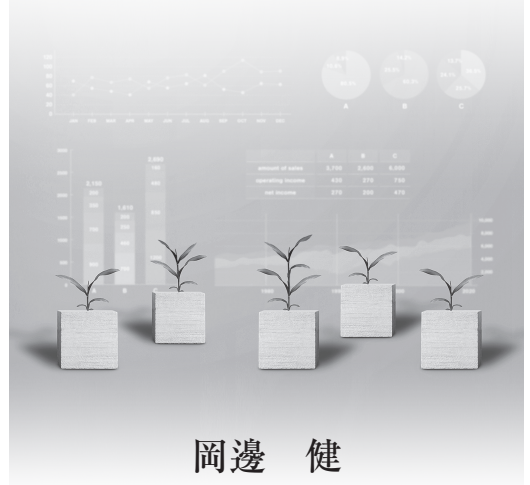


高校教員のための 教育格差入門

松岡亮二(龍谷大学)＋中村高康(東京大学) 監修

48

「闇バイト」問題を どうみるか



岡邊 健

(京都大学大学院教育学研究科教授)

新語・流行語にみる時流

本連載は、中村高康・松岡亮二編『現場で使える教育社会学』（ミネルヴァ書房）の出版を機に、同書執筆者を中心に書き継がれてきた。おかげさまで書籍は7刷に達し、累計発行部数は1万5000部を突破。この種の本としては異例のヒットとなった。

例えば、刊行年の2021年は「親ガチャ」が新語・流行語大賞に入賞した年であった。「教職のための『教育格差』入門」を

副題に持つ同書が注目されたのは、今日の日本社会に「格差」問題が横たわっていることを、多くの人が痛切に感じ取っていることの証左でもあらう。

新語・流行語と言えば、2024年のトップテンには「ホワイ特案件」が入った。トップテン入りは逃したが「トクリュウ」もノミネートされていた。関連して「闇バイト」は2023年にトップテン入りした新語であった。本稿では、これらの新語・流行語が指し示す概念について、論じてみ

たい。

トクリュウとは

「トクリュウ」とは「匿名・流動型犯罪グループ」の略称だ。社会的に注目を浴びるようになった契機は、2022年から2023年にかけて全国で発生し「ルフィ事件」などと呼ばれた一連の強盗事件である。とりわけ、2023年に東京都狛江市で発生した強盗殺人事件は、衝撃的であった。被害者宅に侵入した実行犯4人のうち、2人は20代、1人は当時19歳の大学生であった。同年には、銀座の時計店に仮面姿のグループが押し入った事件も起きており、実行犯には16歳の少年が含まれていた。指示役はルフィらとは別だが、これもトクリュウによる犯罪だ。

トクリュウの初出は、警察庁が2023年に出した指針である。この十数年、「半グレ」と呼ばれる新興の組織犯罪集団が力を持つようになったのだが、単純化して言えば、それら「半グレ」による犯罪が、近年、大きな影響力を持つようになったため、警

察が「トクリュウ」という名称を与えて、取り締まりを強化し始めたという構図である。

トクリュウによる犯罪は、強盗、窃盗、風俗産業への違法なスカウト行為など多様だが、検挙人員ベースでいえば、主要な犯罪は特殊詐欺だ。2024年の特殊詐欺の認知件数は約2万件で、被害額は過去最多の600億円超となった。これらの事件のほとんどは、暴力団が主導しているか、トクリュウによってなされていると考えられる。

闇バイトの実相

強盗にせよ、特殊詐欺にせよ、トクリュウの実行犯は、SNSでの募集投稿で調達されるのが、一般的である。典型的には、X（旧ツイッター）で「即日払いの高額案件があります」「運びの仕事あります 最低5万円から」などの投稿がなされる。「ホワイト案件」は、「仕事」が違法ではないことを強調するために投稿に挿入される、代表的なキャッチフレーズのひとつである。

つまり、アルバイトと同じ感覚で募集されるから「闇バイト」なのだが、問題は、い

ちど応募してしまうと、容易には引き返せない構造になっている点にある。応募者たちは、まず免許証等の情報のアップロードを求められる。指示役に個人情報情報を握られて、抜け出そうとすればそれを材料に脅されてしまうのが、闇バイトの実相である。

社会の機能不全ゆえの問題

「なぜ、そのような怪しい募集に応じるのか」と感じている年長世代の方は多いかもしれない。しかし、ネットで個人情報を送らせて、対面の面接を経ずに雇用するのは、正規のスポットワーク仲介サービスと同じだ。継続した雇用関係を持たず、数時間、数日間の期日で働くスポットワークは、もはや若年世代にとって当たり前。面識がない者同士が集まって仕事するのは、なにも闇バイトに限ったことではないのだ。それを求めているのは雇用者側である。

特殊詐欺で検挙されるのは、30歳未満が7割以上である。2023年の警察統計では、高校生を含む431人の少年が検挙され、このうち7割以上が「受け子」（自宅に

現金を取りに行く役）であった。青少年をバイト感覚で犯罪に加担させないために、学校内外での啓発の強化は不可欠だろう。

ただ、啓発以前の問題も考える必要がある。法務総合研究所の2023年の報告によると、犯罪に及んだ背景として、受け子や出し子（詐取した金をATMから引き出す役）の71%に「無職・収入減」が、27%に「借金」があった。超短期の不安定な雇用が常態化し、失業保険や生活保護などのセーフティネットが正常に機能していないからこそ、ひとたび困窮状態に陥った場合に、犯罪へと足を踏み入れざるを得ないのだ。トクリュウの隆盛と闇バイトへの若年世代の相次ぐ参入は、社会の機能不全とそれがもたらす閉塞感（へいそくかん）に起因する問題であると考えるべきだろう。

なお、本稿で取り上げたような犯罪の問題は、高校の公民科で扱う格好のテーマだと思われる。松岡亮二・高橋史子・中村高康編『東大生、教育格差を学ぶ』（光文社新書）には、授業展開のヒントが詰まっているので、一読をお勧めする。